

Ⅳ 視覚活用と触覚活用に関する実態把握の観点の検討 —特定の活動における活用状況の整理及び行動観察の観点—

1. はじめに

「Ⅱ」で述べた特別支援学校（視覚障害）を対象とした全国調査の結果からは、重複障害幼児児童生徒についての実態把握における課題として、視機能や触覚活用に関する実態把握が難しいと考える割合が高かった。

また、「Ⅲ」では、歩行、教材を用いた指導、作業等、特定の活動の中での視覚活用や触覚活用に関する指導の例を取り上げた（特に、Ⅲ 4（2）参照）。ここでは、視覚を用いた行動や触覚を用いた行動として、どのような行動がみられているかについて述べた。

例えば、A児の独歩歩行に向けた指導の中では、「移動中に特定の場所を見つけて、その方向に進む」、「特定の物（ドアのノブ、手すり等）を見て手を伸ばす」等の行動、B児の事例では、モンテッソーリの円柱さし教材を用いた指導で、「円柱さし教材の穴のあった表面を手指で探って穴の位置をみつける」、「円柱の上下を触覚的に弁別して適切な向きにする」等である。

これら「Ⅱ」「Ⅲ」の内容を受けて、本章では、特定の活動のなかで、視覚活用や触覚活用に関して実態把握をしていくための観点について述べる。

2. 特定の活動の中での視覚活用の実態把握に関する観点

特定の活動において、視覚活用を可能な限り促すためには、その活動における視覚活用の状況を細かくみていくことが必要であると考えられる。これは、視覚活用の向上を促すこと自体が指導の目標となる場合は当然のこととして、それ自体が目標ではなくても、その目標に対応する指導内容や指導方法を、視覚活用という観点から見出すことにつながるものであると言える。指導内容や指導方法を検討する際、全盲ではなく視覚活用が可能である場合は、特定の活動において、視覚をどのように使用するかの検討が必要である。

そのためには、幼児児童生徒等が、視覚を用いた行動として、どのような行動をとっているかを観察する必要があるが、視覚を用いた行動と言っても、種々様々なものがある。

そこで、まず、視覚を用いた行動の種類について、分類及び整理することが有用であると考えられる。

視覚を用いた行動のことを、一般に、視行動（visual behavior）と言うが、Hall and Bailey（1989）では、視行動（visual behavior）を表4-1に示す3つに分類している。また、表4-2に、この3種類の視行動のより具体的な例を示す。

表 4 - 1 視行動の種類と説明

視行動の種類	説明
1. 視覚的に注意を向ける行動 (visual attending behaviors)	視覚的に何かに注意を向ける（見る）ことに関わる視行動で、物を固視する、動くものを追視する、視線を移動する、何かを見つける等
2. 視覚的に調べる行動 (visual examining behaviors)	視覚的に何かを調べる（見て認知、弁別等を行う）ことに関わる視行動で、物や人の顔、絵等が何であるか視覚的に調べる、調べてそれと分かる等
3. 視覚的にコントロールされた運動 (visually guided motor behaviors)	視覚を用いて運動をコントロールすることに関わる視行動で、物を見て手を伸ばす、視覚を用いて移動する、動作を模倣する等

表 4 - 2 視行動の種類と具体例

視行動の種類	具体例
1. 視覚的に注意を向ける行動	1つの物を固視する 好きな物〔特定の物〕を固視する 物を探す 〔動く〕物を追視する 物の向きが変わっても固視する 円状に動く物を固視する 1つの物から別の物へと視線を変える 落ちる物を追視する 周辺視野の物に反応する 離れた場所の物に反応する
2. 視覚的に調べる行動	〔自分の〕手を注意深く見る 人の顔や物が消えると反応する 小さなものに気付く なぐり書きに注意を向ける 絵を見る 絵について何の絵か分かる 離れた所にいる家族が分かる 物と絵をマッチングできる 落ちる物を追視する
3. 視覚的にコントロールされた運動	顔や物へと手を伸ばす 物へと手を伸ばす際に顔も向ける 移動する 音のしない動作を模倣する

ここで、「Ⅲ」で取り上げた事例のうち、A児の事例では、独歩歩行に向けた指導の中で、「移動中に特定の場所を見つけて、その方向に進む」、「特定の物（ドアのノブ、手すり等）を見て手を伸ばす」等の行動がみられている。手指の操作を促す教材を用いた指導では、「教材の駒を見て手を伸ばしてつかむ」、「駒を横に動かして穴に入れる」、「駒が横に移動する際に追視する」ことがみられている。また、「教材の向きがいつもと異なっていることを見て気づいて、元の向きに戻す」こともみられている。

これについて、上記の分類によって、これらの行動を整理してみると、次のようになる。カッコ内に、上記の分類項目の番号を示す。

移動中の場面

- 移動中に特定の場所を見つけて（1）、その方向に進む（3）。
- 特定の物（ドアのノブ、手すり等）を見て（1）手を伸ばす（3）

教材による指導の場面

- 教材の駒を見て（1）手を伸ばしてつかむ（3）
- 駒を横に動かして穴に入れる（3）
- 駒を横に移動する際に追視する（1）
- 教材の向きがいつもと異なっていることを見て気づいて（2）、元の向きに戻す（3）

また、表4-3に、各視行動の分類による Lueck and Heinze (2004) の分析例を示す。個々の視行動について、1～3のどれに相当するかをカッコ内に数字で示す。

表 4-3 朝食場面での視行動の分析例

日常的な活動	視覚活用の要素を伴った行動	促進される視行動
朝食	テーブルの上の食べ物や食器類を見つける	カップ、用具、食べ物を固視する (1)
		特定の物を走査して(scanning)探す (1)
		テーブルの上の物の間で視線を移動させる (1)
	養育者が食物を指し示す	追視する (1) 視覚的に弁別する (2)
	選択を示す	視線を向けることで [選きたいものを] 指し示す (2)
		視覚的に導かれるリーチング [選きたいものへと手を伸ばす] (3)
		視覚的に弁別する [選きたいものとそうでないものを見分ける] (2)

上記の1～3の視行動の分類は、特定の活動のなかでの視覚活用の状況について、より分析的に整理して、状況を把握することを可能にするものと考えられる。また、他の視行動を促すための検討材料としても活用することができると考えられる。

さらに、状況の整理のみではなく、1～3の視行動の分類は、視覚活用の状況に関して、行動観察を行う際の観点として用いることもできると考えられる。具体的には、1～3に相当する視行動が、どのような場面で、どのようにみられるのかを観察し、分析していくことも有効であると考えられる。

3. 特定の活動の中での触覚活用の実態把握に関する観点

前節で、視行動の分類を取り上げた。ここでは、同様の趣旨で触覚が関与する行動の分類を取り上げる。

Smith and Levack (1996) は、触覚を実際の場面でどのように使用するかという機能的な観点から、触覚が関与する行動の分類として、表4-4のものを示している。

これらのうち、1～3の「探す」、「調べる」、「操作する」は、触覚の機能のなかでも、基礎的な機能と考えられる。これらの基礎的な機能の行使のなかで、ある物が何であるか分かたり (4)、物同士や物の各部を比較したりする (5) ことも生じ得る。また、各種の物を特定の場所で見つけ、そこへ返したり、整理したり、集めたりすること (7) も生じ得る。また、その基本的な機能が用いられることで、人とやり取りする (6) ということも生じ得る。従って、(1)～(3)を、より基本的な分類として使用することもできると考えられる。

表 4-4 触覚が関与する行動の分類と説明

分類項目	説明
1. 探す	ランダムに、あるいは意図的に物を探す。
2. 調べる	何かのうえで手を動かして触覚的な特性についての情報を得る。
3. 操作する	物を意図的に動かすこと。
4. 認知する	ある対象を、その対象の記憶と結びつける。[触って、その対象が何であるか分かる]
5. 比較する	同じ部分、違う部分、好みの部分を見つける。[さらに、] マッチングとカテゴリー分け。
6. やり取りする	物を使用して [触って] 要求、拒否、コメント、疑問を伝えること
7. 整理する	いつもある場所で物を見つけ、いつもある場所に返す。物の置き方を工夫することによって整理したりカテゴリー分けをしたりする。ある課題のための材料を集める。

ここで、「Ⅲ」で取り上げたB児の事例では、モンテッソーリの円柱さし教材を用いた指導で、触覚活用が図られている。具体的には、「円柱を残らず穴に差す場合、円柱さし教材の穴のあいた表面を手指で探って穴の位置をみつける」、「円柱の上下を触覚的に弁別して適切な向きにする」、「円柱を穴に入れる」、「穴の大きさが円柱に対して適切か調べる(円柱が入るか否かや、きっちり入っているか隙間があるか確かめる等)」等である。

上記の分類によってこれらの行動を整理してみると、次のようになる。カッコ内に、上記の分類項目の番号を示す。

- 円柱さし教材の穴の開いた表面を探って穴の位置をみつける (1)
- 円柱の上下を触覚的に弁別して (2)、適切な向きにする (3)
- 円柱を穴に入れる (3)
- 穴の大きさが円柱に対して適切か調べる (2)

また、表 4-5 は、触覚が関与する各行動について、Smith and Levack (1996) が示した観察や分析の例である。その観察・分析のうえで立てられた、触覚活用に関する指導計画も表 4-6 として示す。

表 4-5 触覚の活用に関する観察・分析例

触覚技能の活用に関するアセスメント							
生徒: Johnny				観察者: N. Levack			
状況・課題	探す	調べる	操作する	認知する	比較する	やり取りする	整理する
朝食をとる	<ul style="list-style-type: none"> ・スプーンを手にする ・体系的にマフィンを探す 		<ul style="list-style-type: none"> ・スプーンをボウルに置く 	<ul style="list-style-type: none"> ・違うものを渡されると嫌がる ・スプーンに対してふさわしい動作をする 		<ul style="list-style-type: none"> ・手の動作で人との交流を拒否する 	

表 4-6 触覚の活用に関する指導項目例

触覚技能の活用計画シート							
生徒: Johnny				観察者: N. Levack			
状況・課題	探す	調べる	操作する	認知する	比較する	やり取りする	整理する
朝食をとる		<ul style="list-style-type: none"> ・マフィンの包み紙の一部をはがす [そのために、包み紙を調べる] 	<ul style="list-style-type: none"> ・マフィンを小さく割る 		<ul style="list-style-type: none"> ・欲しくない食べ物をマフィンの皿に置く [比較して選択させる] 	<ul style="list-style-type: none"> ・マフィンに触ってマフィンを要求する 	

先述の視覚の場合と同様、このような分類によって触覚を用いた行動を整理し、触覚活用の状況をみていくことが有効であると考えられる。

視覚の場合と同様、上記の触覚が関与する行動の分類は、特定の活動のなかでの触覚活用の状況について、より分析的に整理して、その状況を把握することを可能にするものと考えられる。さらに、触覚が関与する他の行動を促すための検討材料としても活用することができると考えられる。また、状況の整理のみではなく、触覚活用の状況に関

して、行動観察を行う際の観点として用いることもできる。具体的には、触覚が関与する行動が、どのような場面で、どのようにみられるかを観察し、分析していくことも有効であると考えられる。

4. まとめ

ここでは、特定の活動において視覚活用や触覚活用に関する実態把握において、視行動や触覚が関与する行動を整理するための観点を取り上げた。

種々様々な視行動や触覚が関与する行動について、個々別々にみていくのではなく、視行動や触覚が関与する行動の分類に従って整理してみていくことが有効ではないかと考える。さらに、整理した内容に基づいて、他の視行動や触覚が関与する行動を促すための方略を検討することもできると考えられる。

また、状況の整理のみではなく、視覚活用や触覚活用の状況に関して、行動観察を行う際の観点として用いることもできると考えられる。

文献

Hall, A., Bailey, I. L. (1989). A Model for Training Vision Functioning. *Journal of Visual Impairment and Blindness*, v83, n8, 390-96.

Lueck H. A., Heinze, T. (2004). Interventions for young children with visual impairments and students with visual and multiple disabilities, 277-352, in Lueck H. A.(ed.), *Functional Vision: A Practitioner's Guide to Evaluation and Intervention*, AFB Press.

Smith, M. and Levack, N. (1996) *Teaching Students with Visual and Multiple Impairments: A Resource Guide* Second edition. Texas School for the Blind and Visually Impaired.

